アイヌ文化を学ぶ

～映画「カムイのうた」と共に～

カムイのうたの学校

アイヌ共生プロジェクト

差別のない多文化共生社会を目指して。

今、日本には様々な民族が暮らしています。また、誰でもインターネットを通して世界中とつながることができます。このような国際社会を生きる一員として、私たちがより良い社会をつくっていくためには、それぞれの民族の歴史や文化を知り、認め合うことが大切です。

アイヌ民族は、日本列島の北部周辺、とりわけ北海道で独自の言語や文化を育んできた、日本の先住民族です。しかし、その歴史や文化についての国民的理解が十分であるとは言えません。

本書は、映画「カムイのうた」を通してアイヌ民族やアイヌ文化に興味を抱き、より深く知っていただくための『デジタル教材』です。東川町と㈱北海道新聞社が連携したアイヌ共生プロジェクト「カムイのうたの学校」の活動の一つとして、誰でもいつでも手軽に触れていただけるよう、自由に閲覧・ダウンロードしてご活用いただけるようになっています。

アイヌ民族やアイヌ文化への理解を促進し、民族としての誇りが尊重される社会を実現することは、日本文化の多様な発展にもつながるものと考えております。

本書が、差別のない多文化共生社会へと近づく一助となれば幸いです。

映画「カムイのうた」について

映画「カムイのうた」は、1903年に生まれ19歳の若さで亡くなったアイヌ文化伝承者・知里幸恵（ちりゆきえ）さんをモデルに、日本の先住民族であるアイヌ民族とその文化の素晴らしさ・重要性を伝え、差別のない世界を目指すために製作されました。

映画「カムイのうた」のストーリー

アイヌの心には、カムイ（神）が宿る-

学業優秀なテルは女学校への進学を希望し、優秀な成績を残すのだが、アイヌというだけで結果は不合格。その後、1917（大正6）年、アイヌとして初めて女子職業学校に入学したが、土人（どじん）と呼ばれ理不尽な差別といじめを受ける。ある日、東京から列車を乗り継ぎアイヌ語研究の第一人者である兼田教授がテルの伯母イヌイェマツを訪ねてやって来る。アイヌの叙事詩であるユーカラを聞きにきたのだ。伯母のユーカラに熱心に耳を傾ける教授が言った。「アイヌ民族であることを誇りに思ってください。あなた方は世界に類をみない唯一無二の民族だ」教授の言葉に強く心を打たれたテルは、やがて教授の強い勧めでユーカラを文字で残すことに没頭していく。そしてアイヌ語を日本語に翻訳していく出来栄えの素晴らしさから、教授のいる東京で本格的に頑張ることに。同じアイヌの青年・一三四（ひさし）と伯母に見送られ東京へと向かうテルだったが、この時、再び北海道の地を踏むことが叶わない運命であることを知る由もなかった…。

映像媒体の貸出を行っています。

映画『カムイのうた』の映像媒体（ブルーレイディスク等）を無料で貸出いたします。学校施設やイベントホール、公民館などの上映会場をご用意できる方や団体様が対象となります。アイヌの豊かな口承文芸を後世に残す偉業を果たした、アイヌ民族である『知里幸恵』の半生を、映画という触れやすく・親しみやすいツールでお楽しみいただけます。お問い合わせ・お申し込みは、「カムイのうたの学校」ホームページかお電話よりご連絡ください。

お問い合わせ先 / 東川町役場 文化交流課 電話:0166-82-2111（代表）

01 アイヌ民族の文化と歴史

1 交易（こうえき）とアイヌ文化の形成

北海道では約1万年～1万2千年前が縄文時代、約1万2千年～1500年前が続縄文時代、約1500年～800年前を擦文（さつもん）時代、800年ほど前から百数十年前をアイヌ文化の時代であったとされています。

13世紀以降、北海道に住む人びとの生活スタイルが大きく変化します。例えば、竪穴（たてあな）住居から平地住居に変わったり、チャシ（柵や砦）の築造（ちくぞう）、鉄で作った道具をたくさん使うようになりました。こうした変化をきっかけに、これまでとは違う新しい文化に変わったという意味で学問上「アイヌ文化」とよばれています。現在、私たちが考える「アイヌ文化」は、13～19世紀前半にアイヌ民族が和人（わじん）やサハリン（樺太）の人びとと交易を行うなかで少しずつ変化し形成されたものです。

擦文（さつもん）文化からアイヌ文化に変わると、刃物や矢の先に使うヤジリ、そして料理をするための鍋が、石や土ではなく鉄で作られるようになりました。この鉄製品は、本州や北海道の南部に住んでいる「和人（わじん）」と呼ばれる人たちから手に入れていました。

また、カムイノミ（神への祈り）などの儀式や日常生活で使う「シントコ」「トゥキ」「イタンキ」というウルシ塗りの器も、本州から手に入れていました。ほかにも、和人から手に入れたものには、木綿の布やお米、お酒、タバコ、針などがあります。

アイヌの人たちは、本州や大陸から物を手に入れるときに、北海道の産物と交換していました。たとえば、ワシやタカの羽やアザラシの毛皮は、本州では高級品として喜ばれていました。さらに、クマやシカの毛皮、干したサケ、コンブ、またはアットゥシ（樹皮衣（じゅひい）＝木の繊維で作られた布や服）なども和人にわたされました。

アイヌ民族と松前藩の交易の品
出典／北海道博物館

交易品や労働の対価として手に入れた漆器
出典／ColBase（https://colbase.nich.go.jp）

木の繊維で作られた服なども和人に渡されました
出典／ColBase（https://colbase.nich.go.jp）

2 食べ物

昔のアイヌの人たちの食べ物は、住んでいる場所によって少しずつ違いがありました。例えば、海の近くに住んでいる人たちは海でとれるものを、山や川のそばに住んでいる人たちは、季節ごとに実(みの)る木の実や山菜、川でとれる魚をとって豊かに暮らしていました。山では、シカやヒグマなどの大型動物やエゾタヌキやエゾリス、ウサギなどの小さな動物を獲っていました。川や湖ではサケ、マス、シシャモなどの漁を行い、山菜などと一緒に煮て汁ものにして食べたり、串に刺して焼いて食べたりしました。山では山菜を採取し、植物によって、芽、茎、葉、根茎(こんけい)、果実などを利用していました。

アイヌの人たちは、狩りや漁だけでなく農耕も行っていました。ヒエとアワにはアイヌ語の名称があることや遺跡の発掘調査などから、縄文時代から栽培されていたことがわかっています。穀類は主に粥(かゆ)にしましたが、祭事や儀式の際には飯を炊いたり、あるいは団子や酒の原料としても用いられました。また、狩りや漁、採取、農業で手に入れた食べ物はすぐに食べるだけではなく、冬や飢饉(ききん)に備えて保存もしていました。特に春から夏にかけては山菜を、秋には栽培作物と魚を加工して保存していました。こうして、アイヌの人たちは自然の恵みを大切にしながら、工夫して豊かに暮らしていたのです。

自然の恵みを大切に、
工夫して暮らしていたんだね！

＼見てみよう！／

アイヌ民族の食事

ラタシケプ

アイヌ語で「ラタシケプ」とは「合わせる」という意味があり、野菜、豆類を煮て魚脂または、獣脂と塩で味付けした料理です。日常食にも食べられていましたが、儀式や祭事にも欠かせない料理です。

出典／新ひだか町博物館

日常の食事の一例

出典／新ひだか町博物館

3 衣服

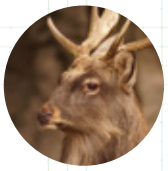
アイヌの人たちは、身近にある材料を使って衣服を作っていました。そのため地域ごとに使う材料や作り方に特徴があります。アイヌの着物には「木綿衣（もめんい）」や、オヒョウやシナノキなどの樹（き）の皮を使った「樹皮衣（じゅひい）」、草の繊維を使った「草皮衣（そうひい）」といった服があります。また、けものの皮を使った「獣皮衣（じゅうひい）」はクマ、シカ、テンなどの陸上動物や、アザラシ、ラッコなどの海獣（かいじゅう）の皮を使った衣服です。サケ、イトウなどの魚の皮をはぎ合わせて作る「魚皮衣（ぎょひい）」という服もあり、他の衣服と比べ袖が細めで、裾が広がった、洋服のワンピースのような形をしているのが特徴です。

自然の素材で作った
アイヌの服、地域や用途で
個性豊かなんだね！

衣服に使われた動植物

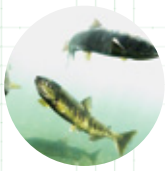
オヒョウニレ

ヒグマ


エゾシカ

アザラシ

ラッコ


サケ

日常の暮らしで着る「日常着（にちじょうぎ）」と、特別な儀式やお祝いごとのときに着る「晴れ着（はれぎ）」があり、日常着はシンプルで、文様などがあまり見られないことが晴れ着との違いです。晴れ着は美しい刺繍がたくさんされていてとても華やかです。今でも博物館などに残されている古い衣服のほとんどはこうした晴れ着です。

ピックアップシーン
Pick Up Scene

日常着

映画の中では日常着をモデルにした衣装を見ることができます。

望月歩（一三四役）

本州や外国など他の地域から入ってきた服もあります。例えば、蝦夷錦と呼ばれる絹でおられた衣服です。また、中国の清の役人の服がサハリンとの交易を通じて北海道に入ってきました。和人との交易で本州から入ってきたものとしては、「打ち掛け、小袖、能衣装」や「陣羽織」などもあります。外国や本州から入ってきた衣服はいずれも貴重なものとして扱われ、特別な場面で正装として使われることが多くアットゥシ（樹皮衣）などの上に着ていました。

＼見てみよう！／

アイヌ民族の衣服

木綿衣

出典／ColBase
https://colbase.nich.go.jp

獣皮衣

出典／平取町立二風谷
アイヌ文化博物館

魚皮衣

出典／萱野茂二風谷
アイヌ資料館

晴れ着

出典／ColBase
https://colbase.nich.go.jp

外来もの（本州）陣羽織

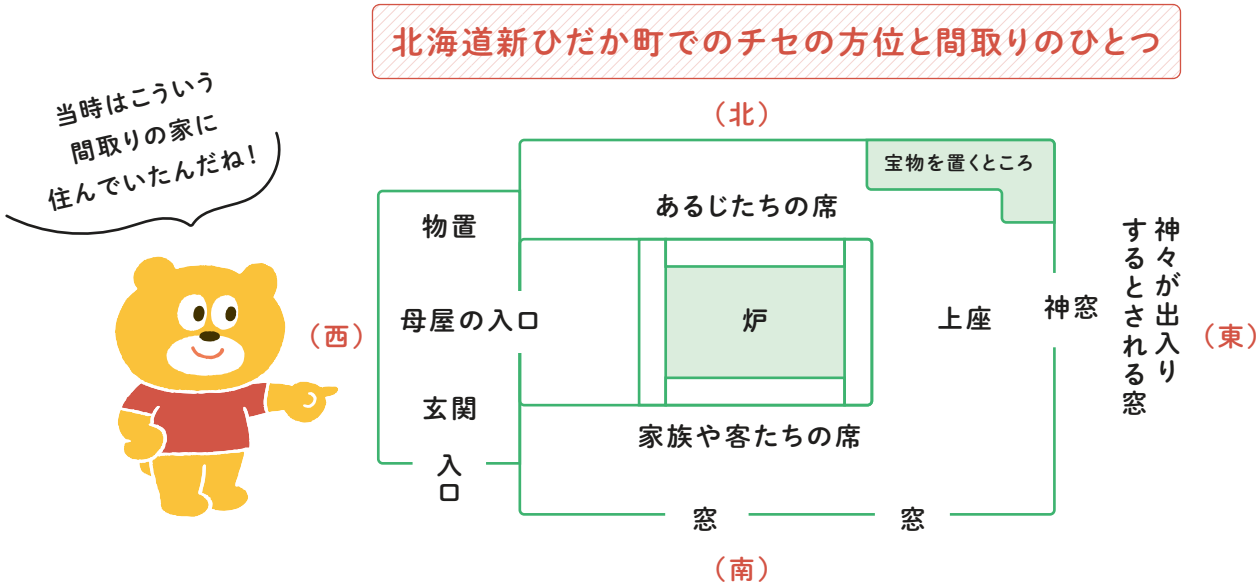
出典／ColBase
https://colbase.nich.go.jp

4 住まい

アイヌの人たちは食べ物や飲み水が手に入りやすかったり、洪水（こうずい）などの災害（さいがい）にあいにくい交通の便利な川の近くや海辺に住まいを作っていました。住まいを作る際は、数軒から十数軒の家で「コタン」と呼ばれる村を作って暮らし、コタンには、たくさんの「チセ」（家）が建てられていました。

チセは20㎡から100㎡くらいの広さがあり、その地方で手に入る材料を使い、コタンの住人たちが協力しあって建てました。クリ、カシワなどの硬（かた）い木を使った柱や、カヤなどの地域で手に入りやすい材料で葺（ふ）かれた屋根を作りました。骨組みや屋根・壁（かべ）などの材料は、釘を使わず、ヤマブドウやシナノキの内皮で作ったひもで結びつけて建てるのが特徴です。

昔と同じ方法で建てたチセ



入り口近くに「炉」があります。この炉は、部屋を暖めるためや食事を作るためだけでなく、重要な儀式にも使われました。炉の周りは、家族や客人が集まる大切な場所です。

部屋には、「神々が出入りする窓」が設けられました。広く知られているのは、この窓を尊(とうと)いとされる方向へ向けるつくり方です。この窓はとても大切にされていて、外から中をのぞくことは許されませんでした。この窓と、中央部の炉とのあいだの空間は、上座(かみざ)として尊ばれます。客人がここに案内されることもあります。

チセの周りには、「祭壇(さいだん)」や食べ物を干すための「物ほし」、食料をたくわえておく「倉」、育てた子グマをかうための「熊檻(くまおり)」、男女別の便所や洗濯物を干すための竿(さお)など、生活するために必要なさまざまな場所が作られました。

ピックアップシーン

Pick Up Scene

アイヌ民族の家「チセ」

テルと一三四(ひさし)が雪深い場所にあるチセで一人で暮らすおばあさんのために薪を運ぶシーン。当時のチセの様子を伺うことができます。

5 信仰（しんこう）

アイヌの人たちは、この世界に存在するあらゆるものには「魂」が宿っていると考えていました。特に、動物や植物、火や水などの自然の恵みや、舟や臼（うす）などの生活に欠かせない道具まで、さまざまなものを「カムイ（神）」として敬いました。
カムイは、自然や物の形を借りて人間の世界に現れ、人々に恵みを与えたり、さまざまな役割を果たすと信じられていました。

カムイノミ

祈りに使われたイナウを川に捧げるアイヌの人たち

カムイノミとは、「カムイ(神)」「ノミ(に祈る)」、すなわち人々が生活する上で必要なことを神(カムイ)に祈る儀式のことです。
アイヌの信仰では、この世の存在するあらゆるものに「魂」が宿っていると考えられています。なかでも、動物や植物など人間に自然の恵みを与えてくれるもの、火や水、暮らしの道具など、人間が生きていくうえで欠かすことのできないもの、天候や流行病など人間の力の及ばないものなどを「カムイ」として敬いました。

ピックアップシーン
Pick Up Scene

アイヌ民族の信仰について

飲み物を床にこぼしたときに、イヌイェマツが優しく「板の間の神様、喉乾いていたんだわ」と言うシーンがあります。このシーンからも、アイヌの人たちがさまざまなものを「カムイ（神）」として敬っていたことがわかります。

また、地震や津波などの自然災害や命に関わる病気は、悪いカムイの仕業と考えられていました。アイヌの人たちは、「自然を保護する」という考え方は持たず、カムイと人間は互いに支え合いながら生きている存在だと考えていました。人間は自然の一部として、その中で住まわせてもらっていると考えていたのです。カムイは、人間の世界で役目を果たすと、やがて家族や仲間が待っている神々の世界へ帰るとされています。その際、アイヌの人たちは、木幣（もくへい）（イナウ）やお酒、団子、干したサケなどの供え物を捧げ、自分たちの生活に必要なカムイが再びやって来ることを願います。

このように丁寧（ていねい）に送られて祭られたカムイは、さらに立派なカムイになり、仲間たちからも尊敬されるのだといわれます。こうした儀式の中で、代表的なのがイオマンテ（熊の霊を送り還す儀礼）です。

人間が動物を捕らえて肉や毛皮を手に入れることは、その動物の命を奪うことになります。しかし、アイヌの人々は、それは動物の体からカムイの「魂」を自由にすることでもあると考えていました。人間はその体を受け取り、カムイの「魂」をカムイの世界に送り還す。そのカムイが再び動物の姿を借りて人間の世界に戻ってくると考えていました。

このような儀式は、生き物だけでなく、使っていた道具が古くなったり壊れたりして使えなくなったときにも行われました。道具をゴミとして捨てるのではなく、食べ物を添えて、丁寧に神々の世界に送り還したのです。

イナウ

出典／ColBase
（https ://colbase.nich.go.jp/）

イオマンテにおける、熊の飾りつけの再現

6 文芸

アイヌの人たちが長い時間をかけて育んできた文化の一つに、「口承文芸」があります。口承文芸とは、文字で書かれたものを読むのではなく、語り手の話を聞いて楽しみ味わうことで伝えられてきたものです。

口承文芸には、いろいろな語り方やお話の種類があります。あるものは、メロディーに乗せて歌うように語られたり、また別のものは、日常の会話のように単調に語られることもあります。大きく「英雄叙事詩」「神謡」「散文説話」の3つに分けられていて、どの語り方も、それぞれの物語に合った雰囲気を作り出しています。

英雄叙事詩（ユカラ）

英雄の物語はユカラなどと呼ばれ、短いメロディーを繰り返しながら語られます。語り手は、それぞれ独自のメロディーを持っているとされ、たとえ他の人から聞いて覚えた物語でも、自分のメロディーで語ると言われています。語り手や聞き手は、木の棒などを持って、座っている近くの地面や床を叩きながらリズムを取ります。物語が進むにつれ、聞き手や時には語り手自身が、物語の展開に合わせて短い掛け声を入れることもあります。一般にとても長いものが多く、語り終わるまでに数十分から数時間、時にはそれ以上かかることもあります。

ピックアップシーン
Pick Up Scene

ユカラ

囲炉裏を囲んでイヌイェマツがユカラを歌っています。語り手も、聞き手も、木の棒などを持って、座っている近くの地面や床を叩きながらリズムを取っています。

神謡（カムイユカラ）

神々の物語はカムイユカラなどと呼ばれ、短いメロディーを繰り返しながら物語の言葉をのせるようにして語られます。それぞれの物語ごとに、おおよそ決まったメロディーがあります。また語るときには「サケヘ」とよばれるくり返しの言葉をはさんで、節をつけて語られるという特徴があります。物語の内容は、動物や植物のカムイ、雷やあるいは病気のカムイなどさまざまなカムイが、カムイの世界や人間の世界で体験した身の上を語るものが多くみられます。

カムイユカラでは、アイヌの女性・知里幸恵の書いた『アイヌ神謡集』が特に有名です。

散文説話（ウエペケレ）

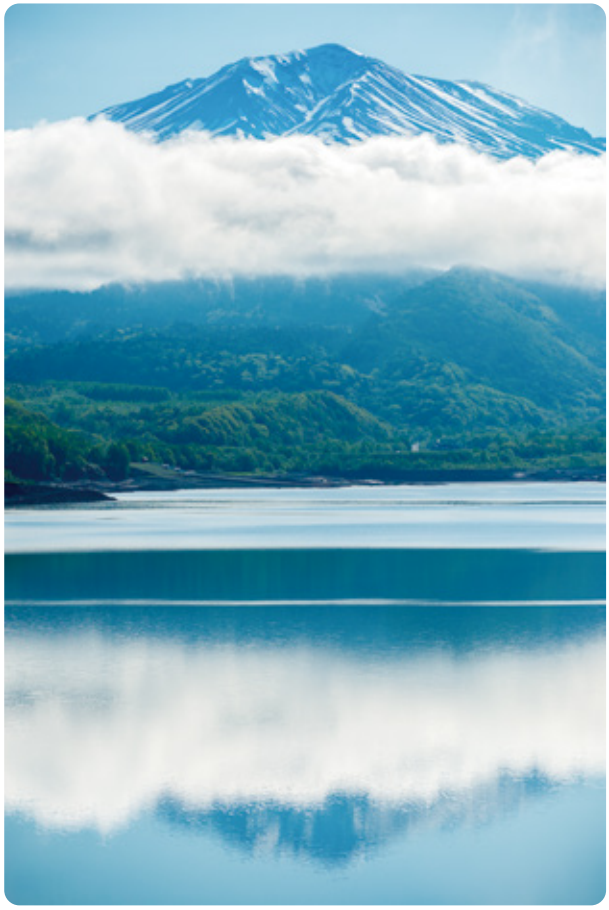
散文説話（昔話や言い伝え）は日常の会話に近いような語り口、あるいはそれよりもやや単調に聞こえる口調や、逆にやや大きく抑揚をつけたりする口調などで語られます。登場人物も人間やカムイ、動物、道具などいろいろです。物語の内容は、人間が主人公で、自分の体験したことやカムイとの関わりなどを物語るもの、カムイが自分の体験などを物語る、内容としては神謡に近いもの、英雄叙事詩と同じような、人間にはない力を持った少年を主人公とする内容の物語などがあります。

カムイユカラ

イヌイェマツとテルが兼田教授にカムイユカラを歌って聴かせるシーンがあります。カムイユカラがどのようなものなのかがとてもよくわかります。

7 カムイミンタラ

大雪山連峰



出典／ひがしかわ観光協会

大雪山連峰は、上川アイヌの人々が「ヌタプカムイシリ（川の曲がる上流部にいる神の山）」や、「ヌタプカウシペ（広い湿地の上につくもの）」と呼び崇敬（すうけい）と畏敬（いけい）の対象としていた山々です。中でも、神秘的な山容や高山植物の大群落などは「カムイミンタラ（神々の遊ぶ庭）」と言われていました。

標高2,291メートルを誇る北海道最高峰・旭岳の麓にある旭岳温泉では、60年以上にわたって、ヌプリコロカムイノミと呼ばれるアイヌの祭事が行われています。

ピックアップシーン

Pick Up Scene

旭岳

映画のオープニングやテルがムックリを演奏するシーンなど映画の象徴的なカットとして旭岳が使われています。

ヌプリコロカムイノミ

出典／写真集「ヌプリコロカムイノミ」

ヌプリコロカムイノミとは、旭岳の山開きにあたり、登山者の安全を祈る祈願祭で、アイヌ語で「山の神に祈る、山の祭り」を意味します。アイヌの伝統儀式、古式舞踊、大きな焚き火や一般観覧者も参加できるタイマツ行進も実施されます。

ヌプリコロカムイノミは旭岳青少年野営場を会場として、厳かなアイヌの儀式から始まり、伝統的な舞踊や歌が披露されたのち、来場者と共にタイマツを片手に行進してかがり火を灯し、最後には皆が一つの大きな輪になって踊る幻想的な祭りです。

カムイミンタラ

映画の中では、旭岳をはじめ、雄大なカムイミンタラ（神々の遊ぶ庭）の風景を見ることができます。

日本遺産
「カムイと共に生きる上川アイヌ」

構成文化財

構成文化財の →
詳細はこちらから

カムイに生きる

1　アイヌ古式舞踊

神の里“カムイコタン”

2　神居古潭（カムイコタン）
～魔神と英雄神の激闘～

3　カムイノミ

神の里“カムイコタン”

4　石狩川

上川アイヌの聖地“チノミシリ”嵐山

5　嵐山 ～チノミシリ～

6　チカプニ

上川アイヌの聖地“チノミシリ”嵐山

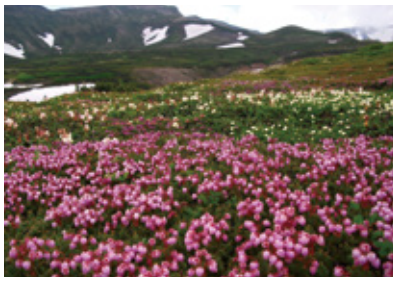
7　チノミシリ・カムイノミ

8　チセ（家）等

神々の遊ぶ庭“カムイミンタラ”大雪山

9　大雪山～カムイミンタラ～

神々の遊ぶ庭“カムイミンタラ”大雪山



10　高山植物～コマクサ等～

11　高山蝶

12　ヌプリコロカムイノミ

神々の遊ぶ庭“カムイミンタラ”大雪山

13　フクロウ神事

カムイと共に生きる人々の営み

14　偉大なる祖先を讃える儀式

15　木彫技術（木彫り熊）

カムイと共に生きる人々の営み

16　川村カ子（ネ）トアイヌ記念館

17　旭川市博物館

18　突哨山（とっしょうざん）

カムイと共に生きる人々の営み

19　石垣山
（サン山の神、アイヌの古戦場）

20　立岩・人喰い刀岩

21　水神龍王神社

8 知里幸恵について

知里幸恵は1903（明治36）年、現在の北海道登別本町2丁目、ヌプルペッ（登別川）沿いで生まれ、幼少のころを過ごしました。父高吉、母ナミは、知里家と金成家の出身のアイヌです。6歳のとき旭川に移り住み19歳まで母ナミの姉、金成マツや、祖母モナシノウクと共に旭川で暮らしました。幸恵は、アイヌで初めてアイヌの物語を文字化した『アイヌ神謡集』の著者として知られています。13篇のカムイユカラ（神謡）が収められているこの著作のアイヌ語表記と対訳、及び序文は高い評価を受けています。1922（大正11）年5月、幸恵は上京しますが、心臓病のため、同年9月18日、19歳という短い生涯を閉じました。アイヌとしての民族意識と誇りをしっかりと持ち、アイヌの言語と文化を伝えるという使命を果たした幸恵は、没後もその著書と、そこにこめられた精神によって今でも世界中のさまざまな人たちに感銘を与え続けています。

知里幸恵

※戸籍上は幸恵ですが便宜上幸恵と表記しております

ピックアップシーン

Pick Up Scene

北里テルについて

映画『カムイのうた』の主人公である「北里テル」は、知里幸恵をモデルにしたアイヌ女性です。
映画を通して知里幸恵の人物像や、当時の様子を知ることができます。

吉田美月喜（テル役）

知里幸恵の歴史

1903年 ● 6月8日、北海道登別にて誕生

1907年 ● 高央(弟)の誕生。
祖母モナシノウクと暮らし始める(4歳)

1909年 ● 真志保(弟)の誕生。金成マツに預けられる(6歳)

1910年 ● 上川第三尋常小学校入学(7歳)

1916年 ● 上川第五尋常小学校卒業(13歳)

1917年 ● 旭川区立女子職業学校入学(14歳)

1918年 ● 金田一京助との出会い(15歳)

1920年 ● 旭川区立女子職業学校卒業(17歳)

1921年 ● アイヌ伝説集ノートを金田一に送る(18歳)

1922年 ● 5月、金田一京助宅に寄寓
9月18日、『アイヌ神謡集』の最終校正を終えた夜、心臓発作により急逝 享年19歳

1923年 ● 8月に『アイヌ神謡集』が刊行される。

1961年 ● 金成マツ、弟真志保、父高吉死去。

1971年 ● 金田一京助死去

1973年 ● 幸恵の評伝・藤本英夫著『銀のしずく降る降る』が刊行される

1978年 ● 『アイヌ神謡集』のエスペラント語訳が刊行される
岩波文庫に『アイヌ神謡集』が収録される

2003年 ● 生誕百年。全国巡回展「知里幸恵…自由の天地をもとめて」徳島市、金沢市、東京都で開催。北海道登別市で生誕百年記念フォーラム「知里幸恵の100年 銀の滴ふる里へ」開催

2008年 ● NHK『その時歴史が動いた』で知里幸恵が取り上げられる

2010年 ● 『知里幸恵ノート』が北海道指定有形文化財に指定される
「知里幸恵 銀のしずく記念館」開館

2022年 ● 没後100年を迎える

▲幼い頃の知里幸恵

▲知里幸恵(左)と金成マツ(右)

◀知里幸恵、小学校4年生の頃の作品

▲職業学校の授業風景

▲職業学校の卒後證書

▲知里幸恵ノート(復刻本)

9 金成マツについて

金成マツ

金成マツは1875（明治8）年、幌別コタン（現登別市）出身のアイヌ女性です。アイヌ名はイメカヌ。洗礼名はマリア。金田一京助に「偉大なユカラクル（叙事詩の語り手）」と言われたモナシノウクの娘で、幸恵の伯母にあたります。彼女は幼少の怪我で足が不自由となります。1892年から宣教師ジョン・バチェラーの援助で、函館・元町に開校した愛隣学校に入学。7年の在学中に日本語の読み書き・算術・体操などと共に、ローマ字によるアイヌ語表記と聖書を学びました。その後、キリスト教の伝道師となり、日高管内平取コタンで12年間、旭川町（現旭川市）近文コタンにて約20年間布教活動をします。近文聖公会日曜学校を運営して生徒に伝道する傍ら、女性には裁縫・編み物も教えていました。近文では母親のモナシノウクが、足の不自由な彼女の身の回りの世話をするため同居し、さらに知里幸恵（当時6歳）を引き取り19歳まで育てました。布教活動を退いてからは、故郷の登別にて母から伝承した《ユカラ》などを愛燐学校で学んだローマ字で筆録し、金田一京助氏と甥の知里真志保氏に合わせて実に160冊にものぼるノートを残しました。その一部は、1958年（昭和33年）、金成マツ筆録、金田一京助訳注『アイヌ叙事詩ユーカラ集』として出版されています。金成マツの功績は私たちが暮らす今の時代にも脈々と受け継がれ、現在では北海道教育委員会によって、研究者の方々と公益社団法人北海道アイヌ協会の協力のもと、ユーカラシリーズとして翻訳し発行されています。1956年（昭和31）年紫綬褒章受章。1961年没 享年85歳。

ピックアップシーン
Pick Up Scene

Point

映画では、イヌイェマツの口の周りが黒くなっていますが、これは刺青（入れ墨）です。アイヌ民族には、女性が真に成人した証として口の周りに刺青を入れる慣習がありました。

島田歌穂（イヌイェマツ役）

イヌイェマツについて

映画の中では、金成マツをモデルとしたイヌイェマツの美しいユカラを聞くことができます。

10 金田一京助について

金田一京助
出典／国立国会図書館

金田一京助（1882（明治15）年生、岩手県出身）は、日本の言語学者、民族学者。日本のアイヌ語研究の本格的創始者として知られています。東京帝国大学時代、師の上田万年に“アイヌは日本にしか住んでいないのだから、アイヌ語研究は世界に対する日本の学者の責任なのだ。”と言われ、アイヌ語に興味を持つようになります。のちに北海道に渡り、アイヌ語の採集を行います。現地を調査する中で、アイヌ民族に伝わる叙事詩ユカラの存在に注目します。1918年夏、アイヌ文化・言語の調査で北海道を訪れていた金田一は、金成マツ、モナシノウクを訪ねます。その時に知里幸恵に初めて会い、すぐに彼女の才能を見出した金田一は、「カムイユカラ」を記録し本として出版することを薦めます。金田一の功績の一つは、アイヌ語の体系的な文法研究を行い、それまで口承で伝えられていたアイヌ語を文字として記録したことです。金成マツや知里幸恵との交流を通じ、人々が口伝で伝えてきたアイヌの叙事詩ユカラを記録しました。知里幸恵の早世により彼女の遺志を継ぎ、アイヌ文化の消滅を防ぐために、ユカラやその他のアイヌ語資料を整理・翻訳しました。彼がまとめた『アイヌ叙事詩ユーカラ集』は、アイヌ文化の貴重な記録として後世に伝えられています。また、アイヌ語の音声や文法の詳細な記録を残したことで、アイヌ語が日本国内で学問的に研究されるきっかけとなり、後の世代に大きな影響を与えました。1971年没 享年89歳。

加藤雅也（兼田教授役）

兼田教授について

北海道でテルと出会った時に、すぐに彼女の才能を見出した兼田教授は、「カムイユカラ」を記録し本として出版することを薦めます。
映画ではアイヌ語やアイヌ文化を後の世代に継承することの大切さを知ることができます。

02 アイヌ民族の文化と現代社会

1 北海道の開拓とアイヌ民族

北海道は、もともとアイヌの人々がその豊かな自然と共に暮らしていた地域でした。1869（明治2）年、日本政府はアイヌの人々の意見を聞くことなく、この島を「北海道」と名付け、アイヌ民族を日本国民としました。政府は新しい法律を制定し、北海道を「国土」として利用し始めました。その結果、原始林は伐採され、町や道路、港が建設され、汽車が運行するようになりました。この「開拓」により、アイヌ民族は「旧土人（きゅうどじん）」と呼ばれ、深刻な差別を受けることとなりました。

2 同化政策とその影響

アイヌの人々は、住み慣れた土地を取り上げられるだけでなく、文化や習慣に多くの制約を受けました。アイヌ語の使用禁止や和人名への改名の強制、刺青（しせい）（入れ墨）や耳飾りの禁止、さらにはサケ漁の制限などが行われました。これらの政策はアイヌ民族を日本社会に同化させることを目的とした「同化政策（どうかせいさく）」と呼ばれています。

3 北海道旧土人保護法

1899（明治32）年、政府は「北海道旧土人保護法」を制定し、アイヌの人々に農業への転換を促しました。この法律により土地が与えられましたが、農業に適さない土地が多く、十分な支援も行われなかったため、多くの課題が残りました。この政策は「保護」を名目としていましたが、実際には同化政策の一環であり、アイヌ文化や生活様式に大きな影響を与えました。

ピックアップシーン
Pick Up Scene

知里幸恵の『アイヌ神謡集』は、このころに出版されました。映画『カムイのうた』は、このような時代を描きだしています。

4 北海道アイヌ協会の設立

第二次世界大戦後の1946（昭和21）年、北海道に居住するアイヌ民族が中心となり、「北海道アイヌ協会」が設立されました。この協会は、アイヌ民族の社会的地位の向上や文化の保存・伝承を目的として活動を続け、1961年に「北海道ウタリ協会」と改称されました。2009年には再び「北海道アイヌ協会」に改称し、新たなスタートを切りました。

協会は、アイヌ語や伝統芸能の保存と伝承、生活支援、差別解消を目指した啓発活動を展開しています。また、国内外での先住民族の権利をめぐる議論にも参加し、重要な役割を果たしています。

5 アイヌ文化振興法とアイヌ施策推進法

1980年代、世界の先住民族が国際連合に集まり、次のような主張を行いました。

1. 先住民族の土地や資源を取り戻すこと
2. 昔から守ってきた文化を守り、発展させること
3. 政治の場で意見を言う権利を得ること

アイヌ民族も先住民族としてこの主張を共有し、日本国内の「日本には昔から和人しかいない」という単一民族論への抗議を続けてきました。その結果、1997年に②の「文化の振興」に関する部分が「アイヌ文化振興法」として成立しました。

アイヌ文化振興法

1997（平成9）年に成立したこの法律は、法的にアイヌ民族を日本の少数民族として認めたもので、正式名称を「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」といいます。一時は絶滅が心配されたアイヌ民族の言語や文化の保存・復興を目的としており、有意義な役割を果たすことが期待されました。
しかし、この法律は文化の振興に重点が置かれており、先住民族としての権利や生活保障には触れられていないという課題が残っていました。

アイヌ施策推進法（アイヌ新法）

2019年（令和元年）5月には、アイヌ民族を法律として初めて「先住民族」と明記した「アイヌ施策推進法」が施行されました。正式名称は「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」といいます。この法律には、アイヌの人々の自立支援や地域振興、差別解消に向けた取り組みなどが盛り込まれており、以下のことを目的としています。

- アイヌの人々が民族としての誇りを持って生活でき、その誇りが尊重される社会の実現
- 全ての国民が相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現

MEMO

メモ

6 いろいろな文化が共に生きる社会に

日本には、異なる言語や文化・習慣を持つ人々が数多く暮らしています。アイヌの人々もその一員として、祖先から受け継いだ儀式や行事を地域や家庭ごとに行い、豊かな文化を築いてきました。しかし、北海道の開拓や国の同化政策により言語や文化が受け継がれなくなり、多くの儀式や行事が行われなくなりました。同時にアイヌ語も衰退し、現在では「消滅危機言語」とされています。

言語の消滅は、その言語が持つ独自の世界観や文化が失われることを意味します。現在、アイヌ語を話せる人は非常に少なく、日常的に使用する人はさらに限られています。しかし、1980年代頃からアイヌの人々が文化や儀式を復活させる運動を始め、そこにアイヌ民族以外の人々も加わり、活動は大きな広がりを見せています。

文化復興と交流の広がり

現在では「アイヌ語教室」をはじめ、民族衣装、楽器、料理、木工品作りなど、アイヌ文化を体験できる教室が開かれ、多くの人々が参加しています。また、昔のアイヌの家や舟、衣服などを復元し、伝統的なサケ漁やシカ猟を再現する行事も行われています。これらの活動は、アイヌの人々の「暮らしの知恵」に触れる貴重な機会を提供しています。

アイヌ文化はいま、伝統を受け継ぎつつ、新しい形で発展しています。伝統的な踊りや音楽、美術作品を国内外で発表する人も増え、アイヌ文化への関心が高まり続けています。アイヌ料理や模様を取り入れたデザインが日常生活に活かされ、多くの人々に親しまれています。

『アイヌ文化振興法』や『アイヌ施策推進法』の制定により、学校や地域でアイヌ文化がより広く知られるようになりました。これらの法律に基づき、文化の保存や発展を支援する取り組みが進められています。その結果、アイヌ語や伝統的な踊り・歌を受け継ぎ、次世代に伝えようとする人々が増え、活動はさらに活発化しています。

アイヌ語教室
提供／平取町二風谷アイヌ語教室子どもの部

アイヌ文化体験
出典／川村カ子トアイヌ記念館

共生社会の実現を目指して

長い歴史の中で、アイヌ文化は困難を乗り越えて受け継がれてきました。この背景には、文化を守り続けたアイヌの先人たちの努力がありました。今日（こんにち）では、さまざまな国や地域で、多様な民族が共に生きることは自然なことであると認識されています。それぞれの歴史や文化を『尊重し理解し合う』ことが、共に仲良く、豊かに暮らすために欠かせない要素です。

伝統的なアイヌ民族の木工品例
出典／ColBase（https://colbase.nich.go.jp）

アイヌ文化の体験教室で作られた作品
出典／川村カ子トアイヌ記念館

今の時代に必要とされる

アイヌ文化の精神

全てを大切にし、自然とともに生きる

アイヌの人々は、あらゆるものを「カムイ（神）」として敬い、自然との共生を大切にしてきました。たとえば、山菜を採る際には必要以上に取り尽くさず、次に育つ分を残すことが当たり前とされていました。また、生活に必要な道具や物は、身近な自然素材を用い、「長く役に立つように」と丁寧に作られました。これらの物品もカムイが姿を変えたものと考えられ、大切に扱われました。こうした自然や物への敬意は、現代社会における大量消費文化を見直す上で、非常に示唆（しさ）に富む考え方です。アイヌ文化の精神は、持続可能な社会の在り方を考えるきっかけとなるでしょう。

みんなが尊重される社会

アイヌの人々にとって、仲間同士で助け合うことは欠かせないものでした。狩猟や漁、家の建設なども、村全体で協力して行われました。この助け合いの精神は、「ウレシパ」（互いに助け合うこと）というアイヌ語の言葉にも表れています。子どもは「村の宝」として愛情深く育てられ、高齢者は「優れた知恵」の持ち主として尊敬を集めました。また、村をまとめる「村おさ」は、雄弁で（パウェトㇰ）、勇気があり（ラメトㇰ）、器量が良く（シレトㇰ）、手先が器用（テケトㇰ）な人物が選ばれ、共同体の中心的存在となりました。こうした尊重と協力の精神は、現代社会においても非常に重要な価値を持つといえるでしょう。

対話による心豊かな社会

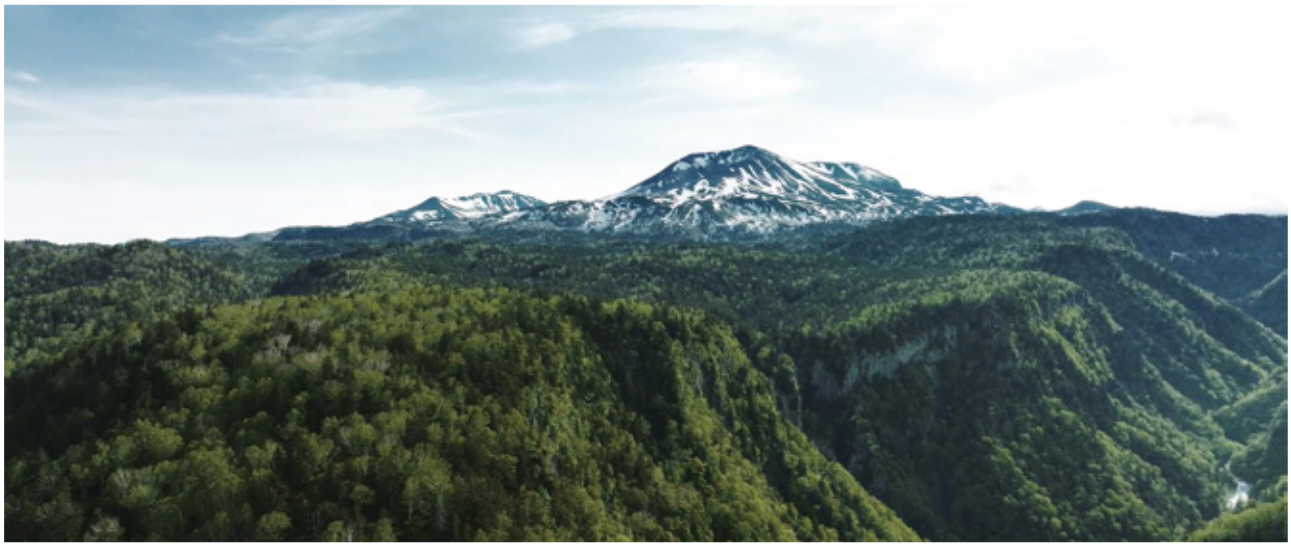
アイヌの人々は、他地域を自由に行き来し、交易や交流を通じて豊かな社会を築いてきました。その生活の基盤には、平和で安定した社会を目指す理念がありました。

争いごとが生じた際も、十分な話し合いによる解決が最優先とされ、力や戦争に頼ることは最後の手段と考えられていました。この対話重視の姿勢は、現代の多様性ある社会における課題解決においても有益な示唆（しさ）を与えてくれます。

7 アイヌ文化の精神を今に生かす

現代社会は、物質的な豊かさを享受（きょうじゅ）する一方で、人と人の結びつきの希薄化や自然環境の破壊、戦争や貧困といった問題に直面しています。このような時代において、アイヌの人々の価値観や生き方には、私たちが学ぶべき多くの知恵が含まれています。

自然を敬い、人を尊重し、対話を重んじるアイヌ文化の精神を理解し、それを日々の生活に取り入れることで、持続可能で調和の取れた社会の実現に一歩近づけるのではないでしょうか。



アイヌ資料を展示している博物館等

アイヌ民族の歴史や文化がわかる！

知里幸恵さんが後世に残した本

「知里幸恵 アイヌ神謡集」

中川 裕 補訂 岩波文庫

「その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。」アイヌの民たちが語り合い、口伝えに謡い継いできた美しい言葉と物語の数々。同族祖先の伝承を後世に残し、アイヌを知る多くの人々に読んでほしい。進みゆく世に抗し、熱き思いと希望を胸に知里幸恵（1903-1922）が綴り遺した珠玉のカムイユカラ。

映画公開を記念してコミック本が発売

「カムイのうた」

漫画：なかはらかぜ 原作：菅原 浩志 発

ビッグコミック賞で佳作入選の漫画家
よってコミカライズ化が実現。アイヌ民族
るユカラと呼ばれる叙事詩を日本語に
集」として後世に残した知里幸恵をモ
絶な生涯を描きます。また、映画には登
ター・アイヌ犬のアドの活躍も漫画なら

各地で
歴史が
ね！

中！

発行者：春陽堂書店

家・なかはらかぜに
族の伝承文学であ
翻訳し「アイヌ神謡
デルに、彼女の壮
登場しないキャラク
ではの魅力です。

01 北海道立アイヌ総合センター
〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目
かでる2・7ビル7階

02 北海道博物館
〒004-0006
札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

03 札幌市アイヌ文化交流センター
（サッポロピリカコタン）
〒061-2274 札幌市南区小金湯27

04 苫小牧市美術博物館（とまこまい）
〒053-0011
苫小牧市末広町３丁目９－７

05 ユーカラの里アイヌ生活資料館
（のぼりべつクマ牧場内）
〒059-0551 登別市登別温泉町224

06 ウポポイ
（民族共生象徴空間）
〒059-0902 白老郡白老町若草町2丁目3

07 知里幸恵銀のしずく記念館
〒059-0465 登別市登別本町2丁目34-7

08 八雲町郷土資料館・木彫り熊資料館（やくも）
〒049-3112 二海郡八雲町末広町154

09 函館市北方民族資料館（はこだて）
〒040-0053 函館市末広町２１－７

10 平取町立二風谷アイヌ文化博物館（びらとり　にぶたに）
〒055-0101 沙流郡平取町二風谷55

11 二風谷工芸館（にぶたに）
〒055-0101 沙流郡平取町二風谷61-6

12 沙流川歴史館（さるがわ）
〒055-0101 沙流郡平取町二風谷227-2

13 旭川市博物館
〒070-8003 旭川市神楽3条7丁目
旭川市大雪クリスタルホール内

14 川村カ子（ね）トアイヌ記念館
〒070-0825 旭川市北門町11丁目

15 名寄市北国博物館（なよろ）
〒096-0063 名寄市緑丘222

16 オホーツクミュージアムえさし
〒098-5823 枝幸郡枝幸町三笠町1614-1

17 帯広百年記念館
〒080-0846 帯広市緑ケ丘2

18 アイヌ文化活動施設ウレシパチセ
〒088-0333 白糠郡白糠町東3条北1丁目2-27

19 釧路市立博物館（くしろ）
〒085-0822 釧路市春湖台1-7

20 阿寒湖アイヌシアターイコロ（あかんこ）
〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉4丁目7-84

21 網走市立郷土博物館（あばしり）
〒093-0041 網走市桂町1丁目1-3

22 加賀家文書館
〒086-0201 野付郡別海町別海宮舞町29

映画『カムイのうた』・
アイヌ共生プロジェクト「カムイのうたの学校」に込める願い

北海道には、言語、宗教、文化に独自性を持つ先住民族であるアイヌの人々が暮らしています。アイヌ語は文字を持たず、長い間、口語伝承によって受け継がれてきました。その中で、知里幸恵さんは、自身の命を懸けて「アイヌ語」を文字として記録し、後世に伝えるという大きな功績を残しました。

映画『カムイのうた』は、大雪山の雄大な自然を背景に、知里幸恵さんの半生をモデルにした物語です。この作品は、アイヌ民族が受け継いできた文化の重要性を伝えるとともに、差別のない世界を目指すためのメッセージを込めて製作されました。アイヌの人々が暮らしてきた豊かな自然環境と、厳しい社会環境を描くことで、文化や価値観の多様性がもたらす尊さを伝えています。

この映画とプロジェクトが、差別や迫害の歴史だけでなく、現代社会にも存在する「いじめ」「差別」「紛争」といった問題に目を向けるきっかけとなれば幸いです。そして、次世代を担う人々にとって、国内外の社会問題を解決し、共生共和共栄の社会を築くための一助となることを願っています。

カムイのうたの学校

映画「カムイのうた」

［CAST］

吉田美月喜（北里テル役）　望月歩（一三四役）

島田歌穂（イヌイェマツ役）　清水美砂（兼田静役）

加藤雅也（兼田教授役）

［CREDIT］

監督・脚本:菅原浩志　プロデューサー:作間清子

製作:シネボイス

製作協力:写真文化首都「写真の町」北海道東川町

東川町×北海道新聞社

アイヌ共生プロジェクト「カムイのうたの学校」

［写真提供］

北海道博物館　公益財団法人アイヌ民族文化財団　平取町立二風谷アイヌ文化博物館

新ひだか町アイヌ民俗資料館　東京国立博物館　一般社団法人ひがしかわ観光協会

大雪山麓上川アイヌ日本遺産推進協議会　一般社団法人川村カ子トアイヌ記念館

シネボイス　大塚友記憲　（順不同）

［文］

北海道新聞社旭川支社営業部

［監修］

知里幸恵 銀のしずく記念館

2024年12月発行

デジタル教材監修

銀のしずく記念館

WEBサイトはこちら ▶

ここは、北海道、登別。アイヌ語で、ヌプル・ペッ（川水の色の濃い川）と呼ばれました。この地に生まれたアイヌの少女、知里幸恵（ちりゆきえ）の業績を紹介するとともに、幸恵をとおしてアイヌ文化を広く伝えていくことが、この記念館の役割です。この記念館はすべて一般の方々からの募金で建てられました。2002年から始まった募金活動は、のべ2500名以上の思いを集め、2010年、秋、「知里幸恵 銀のしずく記念館」として実現しました。

INFORMATION

■住所：〒059-0465 北海道登別市登別本町2丁目34-7 ■TEL/FAX:0143-83-5666
■Mail：ginnoshizuku@carrot.ocn.ne.jp ■開館時間:9：30am～4：30pm（入館は4:00pmまで）
■休館日:火曜日（祝祭日を除く）・日曜日（団体・ツアーは事前予約あり）冬季休館（12月20日～2月末日）

北海道東川町について

北海道のほぼ中央に位置し、北海道最高峰の旭岳（2,291m）をはじめ、美しい田園風景の広がる人口約8,500人の自然豊かな町です。「東川」はアイヌ語のチュプペッ（Chup Pet）の意訳であり、「水源が東にあり日月の出る処」から名付けられたものとされています。稲作を中心とした農業と、木工業、観光業が主な産業です。大雪山からの伏流水の恵みを一身にうけ、全国でも珍しく全戸が地下水で生活しています。町の東部は日本最大級の大雪山国立公園に含まれ、可憐な高山植物、鮮やかな紅葉、一面のパウダースノーなどが特徴として挙げられます。登山をはじめとしたアクティビティなど、四季折々の姿で世界中の旅行者を魅了しています。

1985年には写真の町を宣言し、「写真映りの良い町」を目指し、写真文化を中心に国内外との交流を進めるなど、文化を通じたまちづくりに取り組んでいます。また、家具の産地でもあり、旭川家具の主要産地となっているほか、日本初の公立日本語学校を開設し、日本語留学生が暮らすなど国際交流が盛んな町でもあります。

WEBサイト
はこちら ▶